

一般社団法人都城青年会議所
2019年度 理事長所信

第56代理事長
山口 晋平

【スローガン】

「進取果敢」

自己の確立、そして未来への創造を描こう

【基本方針】

- 1、組織運営の変革に伴うブランディングの向上
- 2、LOM活性化を培う組織力の向上
- 3、魅力ある自覚と夢を持った人間力の育成
- 4、魅力ある未来へ繋ぐまちづくりの創造
- 5、第45回宮崎ブロック大会の実施
- 6、持続的な組織、人財の育成に向けた会員拡大

【はじめに】

戦後の混沌とした時代、青年たちが「明るい豊かな社会の実現」の想いを宿し、日本に青年会議所が誕生して68年の歳月が経つ中で、私たちの住み暮らす都城に青年会議所が誕生し昨年で55周年を迎えることができました。数多くの先輩諸兄をはじめ、関係各位の皆様へ感謝を申し上げる1年であったとともに、私たち青年会議所が中長期的なビジョンを掲げ組織の在り方、定款の改定など重要な方向性を決める時間を過ごさせていただきました。

青年会議所の目指す目的が「明るい豊かな社会の実現」であることに変わりありません。しかしながら、時を経て、青年会議所が誕生した時と現在におけるその意味は、運動、活動を含めて変化しています。情報や流通の発達により、知識や物に溢れている現代で、創始の時代背景から価値観が変化していることはいまでもありません。しかし、いつの時代においても変わらないものがあるとするならば、それは志を同じうする青年が相集い、「修練・奉仕・友情」という崇高な三信条のもとで活動する青年会議所です。

青年会議所は市民意識変革運動を起こす団体であるといわれています。「明るい豊かな社会の実現」のもとに、我々は未熟ながらも地域におけるオピニオンリーダーとして、変革の能動者として、都城圏域のまちを良くしていこうと運動を展開しています。しかし、私たちが圏域において主役ではありません。青年会議所は地域の先頭に立って率先して行動する自立した姿を示すことで、まちに必要な存在になり、そこから都城圏域の人々にこのまちを想う火が灯るのだと考えます。また、現在では組織を超えた行政・他団体との連携

から生まれる運動や活動も重要です。この自立と共助を兼ね備えている青年会議所が地域を牽引することこそ市民意識変革運動であると考えます。

J Cしかない時代からJ Cもある時代といわれることも多い今だからこそ、この三信条を胸に置き、創始の精神を忘れることなく、都城青年会議所の歴史と伝統に感謝し、「ひとづくり」から「まちづくり」を通すことで圏域の活性化に導けるものと確信します。

【組織運営の変革に伴うブランディングの向上】

都城青年会議所は、2012年に社団法人から公益社団法人に移行し、昨年までの6年間を「公益社団法人」として運動してまいりました。しかし、青年会議所が考える「公益」と公益制度法人改革が求めている「公益」とは根本的に意味合いの異なる側面があり、制度を遵守することに力が注がれ、組織運営に支障をきたす場面も多くありました。公益法人制度の想定する「公益」の意味、公益法人格を維持することの利点、一般法人との相違点を再考することにより、先輩諸兄が苦勞して取得された公益法人格を活かしきれないまま、ただ公益法人格を維持するだけの運動にとらわれるべきではないとの結論に至り、さらなる成長の機会を求めて昨年度の臨時総会にて一般社団法人に移行することになりました。しかしながら、この組織運営の変革は、運動や活動の本質を大きく変えることを目指すものではありません。むしろ、これまで以上に組織・個人の能力向上と、公益事業における創造性を高めていかなければなりません。

地域のために効果的な組織、すなわち「ひとのため」、「まちのため」に効果的な組織であるためには、情熱を有し、行動する勇気を兼ね備えた青年たちが、高度な練度、精度、透明性を基盤とする組織運営を行う必要があります。都城青年会議所が築いてきた伝統と歴史を基盤として、地域を輝く未来へ導くための運動を展開していくことを通じて、組織としての存在価値を高める努力を怠ってはなりません。そのためには必要に応じて迅速に運動や活動を地域社会に発信し、圏域に根差した組織運営を行うことが必要です。そのためにも、都城青年会議所を地域により広く知ってもらうことが極めて重要であり、マスメディアとの情報共有はもちろんのこと、ホームページの充実、SNSや広報誌といったツールを用いる積極的な情報発信を通じて周知することを徹底し、我々のブランディングをより強力に推し進めていかなければなりません。手法にとらわれず、先見的な創造を豊かにする土台を築くためにも、都城J Cの軌跡や情報を、受け手を意識しながら発信していきましょう。

【LOM活性化を培う組織力の向上】

J Cは、「ひとづくり」、「まちづくり」に取り組んでいる団体であり、まちづくりの根本は、まちを牽引するリーダーたちが自己を見つめ直し、自己研鑽を積み、自己成長を追い求めることだと考えます。それでは、J C活動を通して自己成長と遂げるためには何が必要でしょうか。まずは、例会や事業、委員会活動などに積極的に出席し参画することです。

参画とは、ただ単に「そこにいる」という出席義務を果たすだけのものではありません。様々な例会や事業で見たり、体験したりすることで得る経験を自分なりに感じ取り、理解し、それを自らが実践、活用（インプットからアウトプットへの変換）することで、はじめてJAYCEEとして参画したことになると思います。さらには、自らの担当例会や事業を企画・運営するだけでなく、他の事業もしっかりと主旨を理解し参画することで、目線の違った問題意識が高まり、大きな自己成長の機会に繋がります。我々がJAYCEEであることに誇りを持ち、全員が参画の意識を持って活動に邁進することにより、メンバー一人ひとりが自己成長し、LOMの活性化、地域におけるオピニオンリーダーの輩出に繋がり、より力強いまちづくりへの創造が生み出されるはずです。

また、我々がJC活動に日々邁進できているのも、多くの人による助けがあって成り立っているということを忘れてはなりません。毎日が当たり前のように訪れる中で、会社の仲間、家族の支えなくしては、成し得ないことばかりではないでしょうか。LOMの活性化を培ううえで、支えられている人への想いと真摯に向き合い、形にしていくことも自己成長の大切な機会だと考えます。40歳までの限られた時間の中で、青年会議所では多くの学びの機会が存在しています。志を持ってJC活動に日々研鑽するためにも、毎日の生活に感謝することを忘れず過ごすことが大事だと考えます。

【魅力ある自覚と夢を持った人間力の育成】

我々青年会議所は、1年毎に全ての役職や役割が変化する単年度制を採用しています。事業の継続性、ブランディング、組織力の維持という点ではデメリットを感じる場面もありますが、この単年度制自体が、「まちづくり」から発信する団体としてではなく、「ひとづくり」に最も重点をおいていることの現れであると考えます。異業種の人間が集う青年会議所の中で、様々な役職や、担当事業の役割を経験することで、多様な視点を持つことができ、価値観を身に付けることができます。また、人の立場に立って物事の本質を考える主体性が芽生えやすい環境を整えています。

主体性とは自らの意志と判断であり、リーダーとして行動を起こそうとする在り方では、最も青年会議所で学ぶべき指導力であると考えます。私たちは行動の一つひとつに真剣に議論し、心の底から思う「実現したい」、「実行するんだ」という確固たる意志を醸成しなければなりません。その意志の決断が、自分自身を動かす原動力となり、その力を周りに波及することで、リーダーとしての自覚を形成することができます。

いまの時代において、リーダーたる立場にある人間は、いかに組織の人間の力を拡大していき、集結させていくことを考えなければ多様性に対応することはできません。そのためのリーダーシップの在り方として有効だと考えるのが、従来の支配型や強権型でもなく、また奉仕型でもない、自身の求心力を核としたリーダーシップだと考えます。

様々な場面においても、他者からの考えに導かれるだけでなく、自分の考えをしっかりともち、それを常に自問自答を繰り返しながら、他者への想いも考えられるような人間力を

高めるべきです。自身の決断が良くも悪くも全てを受け止める心を養い、青年会議所としての運動に取り組んでいくことが大切です。

これからの時代を担う青少年の可能性は無限です。現時点では気づいていないことも、普段とは違う環境から、価値観を生み、意識変化として広がりを見せることがあります。私たちが今後、人口減少、超高齢化社会をはじめ、これまで経験したことがない大変化、大きな価値観の変容を迎えることになる中で、社会の中核を担う世代である青年会議所が、未来を託す子どもたちと青少年の持つ潜在的な可能性を引き出していかなければなりません。

コンピューター技術の進歩とともに、これまでには考えもつかないスピード感で世の中が移り変わっていく現代。小学校ではプログラミング教育の必修化が2020年度から始まります。様々な職業や技術者の業務が人工知能やロボットに置き換えられ、社会から常に新しいスキルの習得が求められていくこととなります。今の子どもたちが大人になるころの社会で、私たち親世代が正確に社会の構図を思い描くことは不可能になっているのかもしれない。そのような未来に向かって生活している子どもたちに、私たちが伝えていくべきことは、人としての本質的な力、先の見えない中でも生き抜くための基礎的な力であると考えます。

情報が膨大な量で溢れている昨今、インターネットの普及により情報のグローバル化が進み、様々な知識へのアクセスを容易にした反面、知識を活用する、蓄えていくことへの重要性は低下したように感じます。今後、より一層重要になっていくことは、その知識を正確に取り入れ、かつ、活用して自らで考える力を養うことです。社会に出ればあらゆる課題を解決する能力が求められます。ただし、私たちが伝えるべきは一つひとつの課題に対する答えではなく、立ちふさがる壁を自力で乗り越えていける創造力のはずです。

人は人との関係の中で磨かれ、成長していきます。他者との関わりの中で自己（人格）を形成し、他人との距離感や思いやりの心などを学び、多種多様な触発の中から人間力としての可能性を広げることができると考えます。近年はコミュニケーションツールの多様化が進み、自分が安易な気持ちでコミュニティを選択できるようになっています。自由な繋がりを選べるようになった半面で、濃い人間関係の構築を図る機会が減少しています。社会に出れば、多様な人間とのコミュニケーションを否応なしに求められます。多感な時期の青少年期であるからこそ、様々な体験や経験を通して、人間力を高め、将来のモラルや社会規範にも影響を与える宝となってもらえるものと考えます。

【魅力ある未来へ繋ぐまちづくりの創造】

我々は都城青年会議所に所属するメンバーである前に、青年経済人であることを忘れてはなりません。この地域をより良い未来とし、明るく照らしていくためにも、「売り手よし 買い手よし 世間よし」の「三方よし」となる健全な企業経営が必要不可欠です。この言葉

が近江商人の心得の一つであることは周知のことと思います。売り手と買い手がWin-Winな関係となり、さらには社会貢献もできることが、企業経営としての在り方です。

稲盛和夫著の中でも「よい仕事をしていくためには自分だけのことを考えて判断するのではなく周りの人のことを考え、思いやりに満ちた『利他の心』にたって判断すべきです。」と、利他の心を判断基準にするように説かれています。

そもそも、企業は何のためにあるのでしょうか。それは人々の幸福や社会における永続的な責任と貢献を果たすことにあります。つまりは企業の経営は人間としてどうあるべきなのか、どう生きていくのかという問いにも繋がっていきます。青年会議所だからこその学び舎を活用し、私たちは地域を牽引するオピニオンリーダーとして学びを怠らず、深い見識と、多様性に適した幅広い視点を持った経営力を発信していく責務があると考えます。

私たちの圏域には、国内でも有数のブランド力を持った資源が豊富にあります。しかしながら、国内消費力の低下、労働人口の減少、中心市街地の活性化促進など、様々な課題も山積しています。この現状を打破する創造を青年経済人が集う青年会議所としての発信力に繋げていかなければなりません。

都城圏域のまちは、今大きな変貌の最中にあります。2018年4月に完成した図書館や子育て世代活動支援センターなどの中心市街地中核施設の整備が進められ、まちなかに市民が賑わう様相が出てきました。このように官民が大きくまちを描こうとしている今だからこそ、「今後どのようなまちにしていきたいのか」を圏域に暮らす一人ひとりが思い描いていく必要があるのではないのでしょうか。

道路や建物といった都市計画における整備は重要なことです。しかしながら、より地域ごとの歴史や風土が合わさることで、社会や経済、文化や環境といった生活の根幹そのものの創造へ移り変わるのであれば、これまでにない斬新で、物心両面における豊かな「まちづくり」ができるのではないのでしょうか。

日々の暮らしの中にこそ地域の課題があります。自分の普段の生活から少し視野を広げることで、素晴らしく見えてくるもの、物足りなさや充実感を味わえないものが出てくるかもしれません。ただ、まちに関心を寄せ、小さな気づきから少しでもまちを良くしていこうというムーブメントを醸成する意識が必要なのです。このまちに暮らす限り、まちづくりには持続的、永続的に取り組んでいかなければなりません。

そのためにも青年会議所として、都城圏域のことをより深く知る必要があります。人は全く知らないことに興味を持つことは困難です。また、「どのようなまちにしていきたいか」と抽象的な考えを投じて、明確なビジョンを描くことはできません。地域の様々な取り組みや、歴史、風土に関心を寄せ、多くの方々と交流をしながら見識を積み重ね、地域の現状を十分に理解しながらも、青年会議所らしい斬新な創造で地域課題にアプローチしていくことが、私たちにできることだと確信します。

また、「肉と焼酎のふるさと・みやこんじょ花火大会」は本年度5回目を迎え、地域に住

み暮らす皆様への郷土愛を深める事業として浸透してきました。さらに、同日開催の都城焼肉カーニバルも、圏域内外の皆様に感動をしていただける相乗効果を持った事業です。より多くの方々への感動は届いているものの、それに合わせて運営上の問題点もあり、ご来場いただいている皆様への不便さという課題が多くあることも忘れてはなりません。青年会議所が行う事業として発展的な創造をもって、今後の課題に向き合っていきます。

【第45回宮崎ブロック大会の実施】

本年度は、都城青年会議所主管による第45回宮崎ブロック大会がこの地で開催されます。ブロック大会においては、宮崎ブロック協議会の運動の集大成であり、併せて主管地である都城の魅力を最大限に発信できる最大の機会となります。私たち都城青年会議所は、過去5回ものブロック大会を主管させていただきました。これまで主管してきた実績を調査、分析することにより、一人でも多く宮崎ブロック8LOMのメンバーが集い、また市民や県民の皆様にご参加いただけるよう、効果的な広報活動を行うとともに、魅力ある実行計画の充実に努めてまいります。さらに、ブロック大会の成功という大きな目標をLOMメンバー全員で共有することにより、組織としての結束力をこれまで以上に高めてまいります。実行委員長を中心に、LOMメンバーが一丸となり、都城青年会議所らしいブロック大会の実現を目指します。

【持続的な組織、人財の育成に向けた会員拡大】

近年において、会員拡大はLOMにとっての最重要課題です。次代を担う同世代の青年たちが、青年会議所でしか経験できない貴重な学び舎としての機会を逃してしまうことは、とても惜しいことだと感じます。拡大の対象者からは、青年会議所に入ることで、どのようなメリットがあるのかとよく聞かれることがあります。もちろん単純な費用対効果で計れるような団体ではありません。私たちは、自らの言葉と行動で青年会議所の魅力を伝えるとともに、メンバー一人ひとりが誰から見ても活力に満ちた、輝ける存在でなければなりません。その輝きこそが、多くの仲間との出会いになり、持続的な組織になるのです。

会員拡大における対象者とのコミュニケーションを持つことは、いわばライブのようなものです。相手の反応を取り込みながら、退屈そうに見えれば興味の沸くような話をしなければなりません。場合によってはその場から早々に切り上げて、再度タイミングを取ることも必要かもしれません。相手が青年会議所の本質を理解していないとすれば、もう一度言葉を変えたり、人を変えたりと説明をし直す、あるいは興味をもったように見えたのであれば、そこにもうひとつ印象的な言葉、経験談を継ぎ足し、さらに関心を深めてもらえるように仕向ける。留意すべきは「量」と「質」のバランスです。

会員拡大とは、組織を単に維持するために行う活動ではありません。未来に貢献する人財を増やす活動であり、学び舎としての青年会議所運動そのものであります。地域の輝かしい未来のために志を高く持った行動のできるリーダーを生み出していく、最初の一步が

会員拡大だと考えます。「情報」を集め、労を厭わず「行動」し、「情熱」をもって伝えることを意識して、自身の活動にプライドをもって会員拡大に邁進していきましょう。

【結びに】

「やってみせ、言って聞かせ、させてみて、褒めてやれねば人は動かじ。」

「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。」

これは、山本五十六氏の名言です。この言葉のとおり私は、2010年の入会より多くの先輩諸兄や仲間とともに学びの中で自己成長の機会を得ることが出来ました。そして、都城青年会議所で多くの経験と学びを能動的に研鑽し、成長を貪欲に追及するメンバーを増やすことが、これまでの多くの先輩諸兄や仲間に対する恩返しであり、責任であると思えます。

55年という節目を終え、56年目となる本年、私たちは新たなるスタートとして果敢に挑戦し、切磋琢磨する青年会議所活動を行わなければなりません。世界は常に変化し、その速度は増すばかりです。その変化に併せて、私たちも「英知と勇気と情熱」の灯を燈し続け、「明るい豊かな社会の実現」に結び付けなければなりません。変えていかなければならないことと、変えてはいけないことを見極め、何のために、誰のために、どのような市民意識変革運動を追及していくのか、メンバー一人ひとりと手を携えながら追い求めていき、個と組織が進んで積極的に事をなし、決断力が強く、大胆に突き進む、力強い都城青年会議所として、地域から信頼され、自らの組織に誇りの持てる、新しい時代を創造していきましょう。